

お客様に支えられて半世紀 味処大番 感謝企画

「～あなたの思い出の背景に～大番作文コンクール」

結果発表と授賞作品のご紹介



最優秀賞 『肌着で頬張る七五三』 (みーちゃん様・福島市南沢又)

サクサクの天ぷらに、娘の大好きな太巻き。滋賀からお祝いに駆け付けてくれた私の母も一緒に、娘の七五三を大番でお祝いしました。しばらくするとお店の方が娘に「苦しいベ。脱いだっていいんだよ。」と。見ると赤い顔の娘。すぐに帯を外すと、開放感に溢れて「もっと食べる。」と満面の笑み。気付かなくてごめんねと笑う私たち。肌着姿の娘と美味しいご飯、お店の方の笑顔は、忘れられない七五三の思い出です。

寸評：かわいらしい娘さんを含めて温かな家族の風景がお店を舞台に展開され、過不足ない文章でうまくまとめられている。ほのぼのとした描写が読み手を笑顔にする。スタッフの気遣いはさすがのひと言。



優秀賞 『喜寿祝いとうなぎの魔法！』 (山崎秀美様・福島市大森)

ばあばの喜寿祝いで大番へ。私は念願のうなぎに胸を躍らせ、2歳の息子は初めてのうなぎに挑戦。ひと口食べた瞬間から夢中になり、ニコニコ笑顔でパクパク…気づけばうなぎは全て息子のお腹の中。残された私は白いご飯をかき込みつつ、嬉しそうなばあばと、得意げにお腹を突き出す息子を眺めて笑うしかありませんでした。大番での喜寿祝いは、うなぎの行方と家族の笑顔で記憶に残る一日となりました。

寸評：家族の幸せな時間がリズムカルに描かれている。まだ2歳である息子さんの仕草の表現も「ニコニコ」「パクパク」など巧みだ。家族のひとときを彩る大番のありがたさを感じる。



優秀賞 『指定席』 (佐藤芳子様・福島市佐原)

私の家からは吾妻山が観えません。ところが「大番こけしの里」には、吾妻山が観える席があります。父の指定席です。ある日、父は遠くの空を眺め乍ら「雪うさが現われたかなあ。」と言うのです。父を連れて指定席に座らせました。「雪うさぎだ！春だなあ、鰻はうまいなあ。」と春を迎える父の姿がありました。その後、子ども達は家庭を持ち、時々、指定席に座り、吾妻山を眺め乍ら、父を偲び、わいわい鰻を頬張っております。

寸評：父親の思い出を温かくやわらかな目線で描かれていて、読み手の心が和む文章。亡き父も「指定席」で一緒に食事をしている光景が浮かんでくるような、とてもきれいな作品だ。

優秀賞 『一枚の写真から』（げんごろん様・東京都文京区）

大番の鰻重を前に微笑む父の写真がある。それは父の「押し」であり、客人が来れば大番が定番。最高の客人であるわが家族（とりわけ孫たち）は、もちろん帰省する度に伺った。そして、写真の鰻重が父の最後の外食にもなった。時は流れ…この孫たちもキモ焼きで呑むシブい若者になり、先日は曾孫ちゃんも竹林亭にデビューした。父の押し活「大番の鰻は、やっぱ別格かしんね。」は着実に成果を挙げている。「んだんだ。」

寸評：コミカルでユニークな文章に読み手はぐっと引き寄せられるだろう。家族に受け継がれた“鰻押し”の楽しさが描かれ、読み終える頃には大番の鰻を味わいたくなる一篇。

社長賞 『誕生日のプチぜいたくデート』（島田恭二様・相馬郡新地町）

いつかは大番の鰻食べたいネエと妻に言われてサプライズで花見山を漫喫した帰りに鰻を食しました。妻は大好物で感動していました。店の雰囲気も品のある店員さんにも。次は私の誕生日に記念写真はいかがですかとすごく愛想の良い片言の日本語を使う店員さんに言われハズカシイからどうしようと言いつつポーズを決め撮って貰いました笑。今では三枚になりました。本当にいい思い出です。また元気で大番行こうネだって、うれしいですネ

寸評

仲良し夫婦の絆が伝わる、優しい筆致。奥様の好物の鰻をサプライズで用意する粋な計らいと照れながらもポーズを決め記念写真を撮る姿が微笑ましく、「思い出の背景」にぴったりの作品。

民報賞 『母の最期の贅沢』（総領の甚六 健様・福島市松木町）

9歳までに両親を亡くした母は、少女時代苦勞を重ねた。生活は慎ましく、父が死んだ後は子ども夫婦と年に数回、竹林亭で食事することが最高の贅沢だった。その母が末期がんで入院した。一時帰宅が許された際、昼食をとったのが竹林亭だった。母は天ぷらうどんを注文した。体調が良かったのだろう。残さず食べ「おいしかった」とつぶやいて箸を置いた。二十三日後、母は亡くなった。母の最期の贅沢は竹林亭の天ぷらうどんだった。

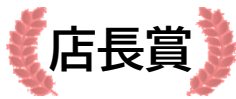
寸評：つつましい生活の中で、控えめなぜいたくを楽しんできた亡き母親の人柄を余韻とともに感じさせる。最期の贅沢として大番の味を楽しんだ母親の様子を想像すると胸に迫るものがある。



民友賞 『あきちゃん』 (Clover 様・福島市瀬上町)

お誕生日おめでとう、来年もお祝いしようね。2020 年 11 月認知症の母親にいつも怒ってばかりの私から謝罪と感謝を伝えたいと思い竹林亭に。普段見た事のないとびっきりの笑顔、おいしいねと話しながら可愛いポーズの写真、楽しく美味しい時間は人の心も幸せにする力があるのですね。我慢強い母は翌年 7 月に癌が見つかり 1 ヶ月後星になりました。竹林亭での 2 人の時間はかけがえのない思い出です。ありがとうございました。

寸評：亡き母親への愛情がきれい事だけでなく、率直に描かれ、親子のよい思い出に、お店の存在が大きく感じる。認知症の母親の介護に悩む中、大番が心の救いとなった。共感する人は多いだろう。



店長賞 『私と大番』 (荒木藤夫様・福島市瀬上町)

大番に通い始めて四十余年。結婚前、心弾む食事をした夜も、誕生した子どもをかごに入れて連れて行った日も、あの店があった。競馬場から打ち上がる花火を眺め、子の婚約や結婚を祝い、夫婦の誕生記念撮影を積み重ねてきた。先代女将さんの優しい言葉も、心に残っている。これからも、夫婦の歩みにそっと寄り添ってくれるだろう。味変を楽しむひつまぶしや目に鮮やかな大番膳を思い浮かべながら、また笑顔で車を走らせよう。

寸評：文章から大番愛を感じた。長年にわたり大番が人生の節目に寄り添ってきた軌跡が丁寧に綴られ、ご夫婦の人生と大番の関係性が深く伝わる温かい作品。先代と同様、心からのおもてなしをしたいと再認識した。



入選 『大番ヘゴー』 (くみちゃん様・福島市南向台)

さあ、大番ヘゴー。暖簾をくぐると、「いらっしやいませ。」和服のお姉さんの声がうれしい。家族 4 人のメニューは決まっている。夫は、うな重。上の娘は、天ざるうどん。下の娘は、ひつまぶし。私は、ひめ御膳。30 年も前からのルーティン。頑張った、楽しかった、おめでとう、と笑顔の食事であれば、たまに涙の食事もあったけど、ここの美味しい食べ物ともてなしが私たち家族の癒し。ごちそう様。大番さん、また来ます。

寸評：テンポの良い文章で家族の温かな日常を描いており好感がある。簡潔な文章が心地よい。美味しいような料理も自然と頭に浮かんでくる。



『人生の節目を彩る場所』(吉成慶祐様・福島市三河南町)

結婚の両家顔合わせをしたのが大番さんでした。温かな雰囲気と美味しい料理に包まれ、緊張していた両親の表情が自然とほころんだのを覚えています。それ以来、誕生日や記念日など、家族の大切な日には必ず大番さんへ。どんな時も変わらぬ美味しさと優しいもてなしに、心が温かくなります。笑顔が生まれるこの場所で、これからも家族の思い出を重ねていきたいです。

寸評：人生の節目ごとに舞台となるお店の大切さがうまく表現されている。大番とのつながりがこれからも続いていくことを想像させる作品だ。



『姉との思い出』(春山栄子様・郡山市富田町)

姉の通院の送迎の途中、大番さんによく立ち寄りしました。香ばしく美味しいうなぎに、姉はいつも嬉しそうでした。難しい脳の病で記憶を失っていく姉は、「お金を持っても仕方ないのよ」と笑って、感謝の言葉を添えた可愛い袋でいつも私にお小遣いをくれました。姉が眠るように亡くなってからもう五年。あれから毎年、姉妹や友人たちを誘って訪れています。柔らかなうなぎを味わうたび、あの日の姉の笑顔を思い出します。

寸評：優しい姉との思い出を想像させる。お店でのうなぎの味が姉の笑顔を呼び戻す描写は温かい。切なく悲しい出来事だが、それを感じさせない文章がうまい。



『元気をくれる鰻屋さん』(白根楓子様・福島市笹谷)

3歳の娘は好き嫌いが多く、いつも外食先を選ぶのもひと苦労。でも、大番だけは特別で、鰻を見ると目を輝かせながら「おいしい！」と夢中で食べます。最初は食べないかなと大人の分だけ頼んだのに、気づくと私の鰻を半分ぺろり。鰻を食べて、にこにこ笑顔の娘を見ると、私まで元気になります。疲れた時やちょっと体調が優れない日も大番の鰻を家族みんなで食べると、魔法のように力がわいてきます。大番は我が家の元気の源です。

寸評：鰻が体だけでなく、心の栄養にもなっているということがよい。好き嫌いの多い娘さんが大番の鰻だけは夢中で食べる姿がかわいらしく、家族を元気にする様子にほっこり。



【入選】『味処大番にまつわる思い出』（菅野百合子様・福島市御山）

母は、私達夫婦や孫娘家族と大番さんで食事をするのが大好きでした。心臓も足も弱っており、無理な遠出は出来ませんでしたが、「どごも痛い所は、ねえない。」「何でもおいしく食べられんない」は、母の口癖でした。ご馳走を前に店員さんに全員揃った写真を撮って頂く。お腹が一杯でも皆と同じくアイスまで注文して食べていましたっけ。母がいない今でも、大番さんに来るたび満足げな母の笑顔が思い出されます。

寸評：生前の母親の姿がお店でのエピソードを通じて生き生きと描かれている。弱った体でも皆と同じ料理を味わい、写真に収まる時間を大切にしたい母親の温かい思いが伝わる。



【入選】『「お子すし」から描く未来』（齋藤コウキ様・福島市御山）

子供が生まれ、あるメニューに目が行く。「お子すし」である。名前が一際、可愛い。キッズ寿司ランチではないことがたまらなく嬉しい。お子として扱ってくれているのも非常にわかる。子供の料理や取り皿を先に持ってきてくれること、豊富にメニューがあることは親として助かる。変わるものもあるかもしれないが、この心配りは変わらないはず。きっと、自分が年老いても娘が連れてきてくれる。そんな未来の思い出を描いてみる。

寸評：「お子すし」から、将来自分が年老いても目の前の小さな我が子がお店に連れてきてくれることを願う親の温かさが伝わる。お店の心配りや子どもの可愛さは変わらないでほしいという思いを感じる。



【入選】『代々大好き大番！』（大番小判様・福島市北沢又）

大番には三十年以上通っています。入学や卒業、誕生日などのお祝いごとには、いつもみんなで大番に集まりました。子どもが大きくなり、じいちゃんと並んでビールを飲めるようになった時は、時の流れを感じてうれしくなりました。もうすぐひ孫も生まれ、四世代で同じ味を囲める日が来ると思うと胸が温かくなります。これからも家族で大番に通い続けたいです。

寸評：「代々」にわたる家族の節目を共にした大番への親しみや思いが伝わる。世代を超えて変わらぬ味を囲む喜びや、家族の絆を感じさせる心温まる文章。



入選『感謝を込めて』（野田千代子様・伊達郡桑折町）

保原にお店があった頃、夫は仕事帰りに寄って一杯やるのが好きでした。私も運転手としてついて行きました。店員さんとなじみになると「ただいま」と店に入ると、「お帰りなさい」と言って迎えてくれるようになりました。席に着くと夫の好きなビールがスーッと出てきます。家に居るようでした。保原店が閉店になり淋しく思いました。今では時々竹林亭さんに食べに呑みに行くのもいいかなーっと思っています。これからもよろしくネ。

寸評：馴染みのスタッフとのやり取りが何ともほほえましい作品。大番が夫婦のもう一つの「家」となっていて心が温まる。

【選考員】

福島民報社 編集局 編集庶務部長 兼 紙面管理部長 佐久間 裕 様

福島民友新聞社 編集局次長 兼 校閲部長 中田 和宏 様

味処大番 社長 今野 陽介 / 御山本店 店長 酒井 直美 / こけしの里 店長 寺島 亜美

心温まる作品をお寄せいただいた皆様に深く感謝申し上げます。
皆様の大切な思い出は私たち従業員にとっても宝物です。未来へと繋いでまいります。
今後も変わらぬご愛顧、よろしくお願い致します。

2025 年 12 月吉日
味処大番グループ 従業員一同